第1分科会

人権確立をめざす教育の創造

部落問題をはじめとするさまざまな人権問題の解決をめざす教育をどう創造しているか

第1分散会

Ⅰ　はじめに

分科会基調は、討議課題をもとに提案された。

地元協力者から次のように呼びかけられた。

「本日の報告、論議、交流を通して深められ、確認し合いたいことは、『人間平等の原点に立ち返らせてくれるもの、それは、事実との出会い、ホンモノとの出会い、人との出会いである』という、同和教育が大切にしてきた『事実と実践』です。本分散会で出会った私たちも、反差別の思いでつながる『なかま』であるということを、論議・交流を通して実感していきたいと思います。」

加えて、ムラの人たちとの「出逢い」を通して自分の「生き方」を考えるようになった自身の変容について、ムラの子どもを中心に据えた部落問題学習や差別をなくす取組、小国町の保育園で行われている子どものつぶやきを集める取組、小国町で始まった人権劇団「光座」の活動について、話があった。

また、本大会地元テーマの「事実と実践・創造～であう　つながる　『ひと　なかま　まち』」が、紹介された。「事実」を正しく知ること、そして、その事実と自分自身のこれまでの生き方とを重ね、これからの自分の立つ位置を確認し、「実践」していく。そんな営みを通して、全国のひと、まちが反差別でつながり、部落差別をはじめすべての差別をなくしていくなかまとして豊かにつながる。この精神を、本研究大会、本分散会での実践交流を通して、全国各地へと引き継ぎ、広げ、つなげていきたいと、呼びかけられた。

この後、討議の柱が確認され、報告・討論に入った。

Ⅱ　報告及び質疑討論の概要

－報告1－③

「大切にしよう」とする心を育てていくために

（徳島県人教）

－主な質疑と意見－

熊本　我が子も5歳の園児で、保育園の先生には感謝している。親にとって思いどおりにいかない日々もある中で、十数名の職員でよくやっていると思う。親である自分も、子どもから大嫌いと言われるので、通じる思いがある。報告にある子どもの現在の様子について知りたい。

報告者　その子は、3月に保育園を卒園し、4月から幼稚園に行っている。様子を見に行くと、砂場で遊んでおり、「久しぶり」と声をかけると、「せんせ！」と応えてくれて喜んでいた。幼稚園の職員に聞くと、怒ることもあるのだが、「理由があるから怒る」ので、話をするとわかってくれるとのこと。友だちと落ち着いて生活しており、友だちと仲良くしている姿に安心している。

熊本　「またゆうきさんが…」と子どもたちが言う中で、報告者が「自分から関わりを変えていかねばならない」と思う姿勢がよい。昨今は問題を「子ども自身」に置いて「支援学級をすすめる」流れが多いが、「療育」という流れにはならなかったのか。

報告者　発達や療育についても考えたが、周りの環境や関わりを変える中で変わるだろうと考えた。トラブルが多かったので、「いけないことはいけない」ということを伝えることが必要だったが、第一声が叱責だったので、本人から受け入れてもらえなかった。そのため、保育者自身の関わりを変えることを第一にと思い、まずは「思いを聞く」「共感する」ところから始めることにした。その後に「してはいけないことだったよね」と注意するようにすると、少しずつゆうきさんの方から自分のことを話してくれるようになってきた。まず周りの環境や自分の関わりから考えて変えてみる。試してみるのが大事だと思った。

福岡　まずは、自分のやり方を変えるというのが大事。「軸になる子ども」を中心にクラス運営をしたと思うが、周りの子への対応はどうだったか。

香川　周りの子たちもトラブルがあったと思うが、その対応もどうだったのか。

報告者　クラス全体でトラブルが多かった。例えば、おもちゃの取り合いからたたくなど。ゆうきさんは一番多かった。保育活動が止まってしまうこともあった。「まってな」と周りの子に言って、違う遊びをしてもらったり、隣のクラスの先生にヘルプを頼んだりした。ゆうきさんはいろいろとアイディアも出す子だったので、周りの子から人気はあったが、距離をとられることもあった。そのため、自分もゆうきさんの良いところをアピールして伝えていくと、ゆうきさんの虫の扱いや知識にみんなが注目していった。ゆうきさん以外もたたいたり、バカと言ったりする子がいたが、丁寧に自分や相手の思いを聞く、その後の行動をみんなで考えるなどしていった。

熊本　娘も保育所の仕事をしていて、同様の悩みをよく聞く。ゆうきさんの変化は先生の関わり方の

変化で素晴らしい。「一人ひとりが安心して楽しく暮らせるクラス」が目標だが、具体的にどんなクラスか、知りたい。

大阪　自分が大切にされている実感がある。自分が大好きなものを冷やかされるのではなく、大事にされていること。これが安心につながるキーワードだ。そういうことを伝え合う活動をしていたのか。どのタイミングでしていたか。

報告者　自分の考えでは一人ひとりが自分を表現する、それを受け入れる先生や友だちがいるクラス。在籍児は0歳児から3歳児と幼いが、保護者と離れてほとんどの時間を過ごす園である。だから自分の思いをすべてさらけだせる場所にしたい。自分の思いをしっかりと伝えることができるクラス。子どもたち同士が互いに伝え合い、トラブルのときも表現できるようにしたい。カブトムシの孵化のときは、みんなで円になって話し合った。他の子たちの思いを聞き合い、相談ができるようにした。全員の思いを知り合う、ということをした。伝え合う活動については、みんなの好きなものが違うこと、認め合うことを心がけた。「みてみて〇〇ちゃん、こんなことできるよ。知ってるよ。」「すごいな〇〇ちゃん、ダンスできるんだよ。」と、得意なことをしっかりとみんなに見せるように心がけた。

－報告２－①
「シュウくんの小ちょうが、大ちょうのかわりをするのがすごいとおもいました」
（熊本県人教）

－主な質疑と意見－

大阪　授業研のときに、子どもたちがちがうところに向かっていったとき、どんなふうに修正したのか知りたい。以前、シュウイチくんの担任をしたときに、どう周りに働きかけたのか。今回は、どういったねらいで、兄のことを綴らせようと思ったのか。

報告者　今までだと、「森のなかま」で犯人捜しをすることが多かったが、みみすけが犯人という発言は初めてだったので、驚いた。そのため、紙芝居をゆっくり確認し、だれが何を言ったか、確かめるようにした。「みみすけは、何回もしてないと言っている。足跡は、みみすけだけのものではなかった。さいばんちょうは、みみすけの話を聞いていない。」などと、子どもたちと事実を確認していった。

　保育園では、からだのしくみの学習をするなど、シュウイチさんを中心に据えた取組をしていた。入学を迎え、小学校では、全トイレにウオシュレットを導入した。音楽の時間に、おなかがぐるぐると鳴る様子に、同じ保育園の子たちは、シュウくんは、こういう子と、周りの子に説明していた。シュウくんは黙っていたので、自分のことを言えるようになるとよいと思い、互いの体のことを話せる、学級づくりをした。

　妹のヒマリさんは、シュウくんのことが大好きと思っていたので、それを綴らせたいと思った。

大阪　自分の気持ちを大切にするところがよい。どんどん、ヒマリさんが自分の気持ちを伝えられるようになっている。作文で自分の気持ちを伝えられるようにするために、言葉かけも含めてどんなところを指導しているか。

大阪　みんなに表現することが難しい。だんだんとヒマリさんが変化していくところが素敵。ヒマリさんの見たこと聞いたことを話すところを見ている周りの子はどうだったのか、興味がある。他の子も、自分のことを話すことができていたのか。

大阪　ヒマリさんは一番に発表した。大事な場面で黙っていた頃と比べると変容が見られる。慣れだけでなく、何がそうヒマリにさせたのか？お兄さんの話を聞いた、周りの子の様子はどうだったかについても知りたい。

報告者　きれいごとを書くことがあるので、「何を書いてもいいから、本当のことを書こう」と呼びかけた。「うれしかったこと、楽しかったことだけでなく、くやしかったことも書いていい」と呼びかけた。本当のことを書くということを大事にした。「こういうことを書いてきてね」とは言っていない。最初は、学校のことを書いていた子どもたちが、だんだんと、自分の家庭のことを書くようになった。

　ヒマリさんは、もともと元気な子で、弱くて言えない子だとは思われていない。ヒマリさんが言えるようになってすごいということはない。当たり前のこととして受け止められている。

　他の子どもも、自分のことをどんどん出している。家の仕事の話や、体の小さい子が「ちっちゃいね」と言われるのが嫌だったことなどを綴っていた。

　練習して慣れることで、本番を迎えられるようにした。「慣れだけではない」は、その通り。幼稚園で、「言わないと終われないよ」と言われてきて、本人の中では自分のことを言うのが嫌なこととされていた。そのため、「そうじゃないよ」と話していった。

－1日目総括討論①－

熊本　熊本の報告は、子どもの変容が見られ、継続的に取り組んでいるすばらしい実践　周りの子どもたちも自分の思いを出せるようになった。周りの変容にもつながった。この取組を通して報告者自身の変容があれば、聞きたい。

報告者（熊本）　子どもの結果を早く出したい、押しつけてしまうことがあると、自分で思った。力をつけたいという思いが、かえって子どもを追い詰めてしまう。そういうことが自分にもあることを考えさせられた。

熊本　報告にある、おかしいことはおかしい・・・自分だったら等の表現について、大事にされていることがわかったが、報告者の考えを知りたい。

報告者（熊本）「おかしいことはおかしい」ということについて、職員の中には、注意することと勘違いしている人がいる。そうではなくて、差別についておかしいと気づくことが大事。自分の暮らしのこととか、楽しかったうれしかっただけでなく、つらい、きつい、それが言える、間違った事も言い合えるなかまであってほしい。

熊本　報告者の過去の取組を思い出した。報告者の原動力は何なのか、知りたい。

報告者（熊本）　私は部落問題を学校の授業で知った。好きな時間であり、大事な勉強をしていると思っていた。4 年生で部落問題に出会い、「何でこんな事が起こるんだ。おかしい。」と思っていた。当然の権利があると教えてもらった。初任や2校目でムラとの出逢いがあった。

佐賀　我が子に対して、何度も聞こえるように、しゃべれるようになってほしいと、言葉の訓練に奔走した自分を振り返った。2 本の報告を聞いて、本人ではなく周りの環境を変えていく、徳島の実践に勇気をもらった。熊本の実践を聞くことを楽しみに、参加した。シュウさんがいることによって、周り、おとな、社会を変えていく取組になっている。地域の中で、報告者2人の教え子がいることが、同和教育であり、インクルーシブな社会だ。現在 4 年生担任をしており、1 学期から石川一雄さんの取組に踏み込んでいる。絵を描かせる。そこまで至っていないことを反省する。一緒に学ぶことこそ学ぶこと、一緒に暮らすことこそ学ぶこと。部落差別解消推進法の法律が出るまで、部落という言葉をどう使うのか考えていたが、法が出て、勇気が出た。就学前の段階、保育園、小学校で同和問題について実践されていることが大事。

熊本　就学前は基礎づくり。連携のもとで、小学校とつながってほしい。送り出すときの職員のつながり、お互いが理解し合っていれば対応ができる。

報告者（徳島）　5 月に幼稚園へ子どもの様子を見学に行く。幼稚園からも保育園を見に来る。互いの理解ができている。今後は子どもたちが安心して暮らせるクラスをつくるために力を入れていきたい。4 月に担任になったときに、毎年自分のクラスを一番楽しいクラスにしようという目標を立てている。登園時泣いてしまう子もいる。不安を少しずつ取り除いていきたい。がんばりたい。

徳島　板野町では、4 歳になったら、保育園から全て幼稚園に行く。幼稚園でどう生活しているのか。そのために 3 歳でどんなことをしていくか。早めに引き継ぎをしている。板野町に全ての校種の学校があり、連携している。

徳島　育ちを町全体で見て行く組織を続けている。人権教育の授業研を年 4 回行っている。各校種参加している。

大阪　討議の柱①に則り、報告に共通していることは、本人が自分を表現する場所をつくっているところ。家庭との連携を経て安心する場所をつくる実践。これまで、なかなか表現できない子にどのようにアプローチしたら変容していくか、聞きたい。

報告者（熊本）　現在 1 年生で、兄が 4 年生で不登校の子がいる。妹もそうなるのではないかと思われていた。毎日ハートの絵、木目のような模様しか描かなかった。自分の顔を描く時、眉が描けないと泣きじゃくった。しばらくハートと木目を書いたが、自分としては否定しなかった。いいとか悪いとか言わず、話を聞く。待つことが大事。こちらから指定しない。あえて言わない。焦ってしまうが、待つ事が大事、地道に続けること。

－1日目総括討論②－

京都　自分自身が京都の被差別部落出身であり、近くには同和保育園がある。部落差別の結果として、比較的裕福な家庭は幼稚園へ、経済的に厳しい家庭は保育園へ通園する傾向がある。これらの現状を、ただ表面的にとらえるのではなく、園児の背景にある保護者の生活、さらにはなぜそのような生活を強いられることになったのかをしっかりと認識することが重要である。徳島県の傾向として、保育所から幼稚園そして小学校へ進んでいくのか。あるいは、保育所から小学校へまたは、幼稚園から小学校へ行くのか。さらには、同和保育所はないのか、知りたい。

徳島　本園周辺の現状では、保育園に預ける場合は本園の1園のみとなっている。かつては、同和保育園があったが、少子化等のために、現在は1園に合併されている。また、保育園の後は幼稚園へ進級する流れとなっている。入園の条件としては、基本的には就労されていることが条件である。現在は、同和保育園としては残っていない。

熊本　熊本の報告者とは知り合いである。部落問題との出会いについては、大学の講演で知ることとなり衝撃があったことを覚えている。「一人ひとりの子どもをどうとらえるか」が重要。「なぜこの子を語るのか」という機会がある。「子ども・保護者とどうつながっていくのか」については、教師の感性が大切であると考える。自分自身の実践として「家庭訪問・日記・人権学習」のことを思い出したが、今でも非常に重要だと考えている。

熊本　同和保育所に勤務。36年間学校の給食をつくってきたが、かつて園長から「まずは、園児を見てから給食をつくるのが仕事だよ」と助言をいただいたことがあった。ジビエ料理をつくったこともある。また、教室と給食室が一体となっていた。自ら、保育室に入って交流している。現在では、ダウン症の子どもとの関わりについてのレポートも作っている。

福岡　教師の感性の重要性について。討議の柱⑤に関連するが、現在は大阪のひらがな教材集を使っている。学校内においては、保幼を迎えての交流を行っている。また、保育園と幼稚園教諭を一堂に交えての会議あり。改めて連携の重要性を改めて感じた。同和問題等の人権について、十分には理解をしてもらえていない管理職がいるが、その原因として「児童生徒支援加配」のことを伝えられていないと感じる。

熊本　連携のことで、かつては小中連携がベースになっていた。小中高の連携の重要性も非常に感じる。さらには、保幼小中高の連携の重要性もある。その際、助言者がポイントとなる。子どもの学び・教師の学びがともに重要である。同和保育所という名前が変わっても頑張ってほしい。

－1日目まとめ－

協力者　徳島の報告のように、その子どもの一人ひとりの良さを認めているか。小さくても幼くても人。その子の人生も変わる。自分の思いを言葉にする。熊本の報告のように、見た目や優位性でよしあしを決めるのではない。事実から考えることが重要。保護者・子どもたちのなかまづくりをすすめていく。子どもに早く結果を出させたいことが子どもを追い込む。「待つ」ことが重要。同じ結果を求めることをやめませんか。子どもの権利の尊重、生きる権利・育つ権利・守られる権利・参加する権利の具現化。報告者のような授業ができていたか自己反省する。同僚にも伝えていきたい。

－報告3－②

わたしをはっとさせる A さんのことば
～「～せねばならない」にとらわれないことの大切さ～　（佐賀県人教）

－主な質疑と意見－

大阪　「私は障がい者」という発言が「キライだ」とするAさんの発言の意味合いについて、自分が嫌いだと言っているのはどういうところなのか。現在はその考えは変わったのか。

報告者　教室に入れない、じっとしていられないということに、いけないことをしているという思いがあったようだ。友達から「どうして」と聞かれた時、「申し訳ない」と話していた。自分ができないことを「障がい」と、とらえていたのではないか。数が苦手、たくさんの人の中には入れないということを、キライと思っていた。人それぞれなので、「Aさんのステキな部分、そのままでいい」と伝え続けた。

6 年生では担任しなかった。私だけが理解者ではつまらないから。学校の箱の中にいる必要はないと、Aさんの理解者を増やしてほしいという思い。現在のAさんは中学生。掲示してある絵は小学校に顔を出してくれたときに描いてくれた絵。「分かってくれる人、支えてくれる人がいる」と言っていた。中学校の体育の授業を見に行ったら、ダンスをみんなでしていた。まだまだ自分を全部出せていない。

熊本　LGBTQの友達からの相談とあるが、Aさんの周りに、相談したり話したりというなかまがいたのか。他の子の意見にAさんのがんばりを認めるものがあったが、そのことをAさんに伝えたときのことを聞きたい。中学校になっていろんな活動に参加している。4年生、5 年生の状況があって、学校ではどのような段階があって中学校に送り出したのか、引き継ぎなど、個別で対応したことなどについて聞きたい。

報告者　Aさんが当事者なのかは、今も分からない。当事者のBさんの出前授業を聞いた際、集団の中で活動はできないが、将来の夢を「カウンセラー」と話す魅力的なAさんだった。6 年では支援学級に入るが、Aさんにはなかまがたくさんいた。授業参観について、入れなかったときは、1対1で資料を見たりする。CさんのことはAさんはうっとうしいと言っていたが、報告者が話したら、「いいやつだよね」と言っていた。Aさんは、教室にずっといられず、家に帰ることもあった。5年生の時、Aさんの所在を把握することが難しかった。支援学級のなかまに任せて、6年生では少し離れて見ていた。6 年生ではほぼ毎日 1 日いた。中学校に引き継ぎをして、とても良くしてもらっている。

熊本　学校全体としてAさんのことを見守っている雰囲気、他の子どもにも温かく接している感じを受けた。取組があれば、聞きたい。

報告者　道徳の年間計画に人権集会を入れたりしている。命をテーマに取組がなされている。沖縄についてのことも入れている。いろんな資料をサーバーに入れている。

大阪　障がいという言葉の捉え、A さんが苦しくなった要因は何か。周りの課題としたいが、どういうことが苦しかったのだろうか、周りの友達はどう見ていたのか。

報告者　1～4年のことはよくわからない。A さんは、担任の先生は大好きだったと言っていた。最大

の壁は、学校のルールは同じ時間で同じことをしなければいけないこと。縛られたところにいられない自分がだめだと思っていた、悪いと思っていた。

－報告4－④
みつめる　みとめる　ふみだす
～どんなことでも話せる　なかま～
（大阪府人連）

－主な質疑と意見－

京都　リポートに出てくる「ソンセンニム」とは何か。

報告者　東大阪市で朝鮮人にルーツがある子ども向けの母国語教室の先生のこと。

香川　差別に立ち向かういろんな人の覚悟が伝わってきた。自校の校区にも部落があるので、こんな授業をしてみたいと思った。こちらでも「子どもを起こしてくれるな」「部落という言葉を出すな」ということがあるが、「知識としては、差別はおかしい」ということを繰り返し行っている。だが、上辺だけになっている。「こんなことしたらいかん」「それはあかん」とはなるけれど、どこか他人事である。「子どもたち同士が本音をぶつけ合う」をめざしたいが、なかなか難しい。どんな経緯や変容があったのか。子どもたちの保護者からの「寝た子は起こすな」的な要求に対して対応はどうしているのか。子どもたちがネットで調べて、自分たちが被差別の側で差別されていることを知って、初めて自分が当事者だと気がついた子はいるのか。

報告者　本音をぶつけ合うまでに時間がかかった。子どもたちは「Aをこわい」と思っていて、Aもなんとなくそれを感じていてA自身も嫌だった。気を遣われるのがお互いに嫌だったのが、修学旅行を前に、その本音が出てきた。ちょっとした、ふとした時に出てくるものだ。それを聞き流さずにいることが大事である。
　1年生のときからずっと生い立ちの学習からスタートして、積み重ねてきたものが根付いている。その土台があった上で、保護者と話せた。差別と向き合いながらずっとやってきて、積み重ねがあったから、「寝た子を起こすな」ということはない。近隣の地域外に住んでいるけれど、「もしかして自分も？」「おじいちゃんのうちがその地域」「ぼくもなんかな？」と、振り返りに表現する子どもはいた。

熊本　先日、大阪のホテルに泊まり、労働者が集まる一角があった。その際に、自分の叔父の言動の中に、差別的な見方があるのを知った。被差別部落が熊本も点在しているが、温度差がある。全体で取り組んでいくにはどうしたらいいのか。みなさんに聞きたい。

大阪　東大阪市では、地域の人の思いや保護者の思い、願いがあるが、差別の現実もある。インターネットで差別がさらされる。それに対しては、府内でも実践から学び、「どうしていくんだ！」ということを大事にしてきた。地域の温度差については、東大阪が一つになってとりくむことを意識し合いながら　教委、研究団体も一つになって、オール大阪でやっている。

大阪　大阪市にも、被差別部落が点在している。行政も、入学時にルーツのある子については「本名を名乗ってくれ」と手紙を配付している。入学式の最初にはその話にふれている。24区の区域ごとに年に2回、学校や区全体で集まって人権交流会を行い、とりくんでいる。

熊本　1年生のときから保護者と語りこみをしたかったが、個人情報だから知らせられないと管理職から言われた。大阪が真逆でうらやましいと感じる。

熊本　部落問題を他人事と捉えるのではなく、どうやったら自分事となるか。体験の中から、自分の差別性を見つけることが必要。子どもたちに自分を語らすためには、教員が語ることがまず必要だ。「人権文化センターを訪問した際に気づいた」「保護者の思いをききとりながら進めた」とある。保護者は伝えたいと思っていたのか。保護者自身から伝えたいけれど、伝えられなかったのか。

報告者　いつ話せばいいのかと、タイミングをはかっている保護者はいる。すぐに話せることではない。差別に出会ったときに知っていくのではなく、学校の取組の中で知って、教員と保護者が「子どもたちの命を一緒に守っていこうね」としたい。まるごとは難しい。でも卒業前には、いろいろなことを保護者が話してくれた。一緒に差別とたたかっていく中で、話せている。

大阪　報告の中にある聞き取りをしたのが自分。自分の友だちが、被差別部落の子どもの保護者であった。最初は「わざわざ伝える必要はない」と言っていた。しかし、その友だちの姉が結婚差別を受けた。その友だち（子どものお母さん）から私は呼び出されて、「差別はあるねんで。教育の力で差別をなくしていかんなんで！あんたは教員になって、ムラの思いをもって変えていくんや！」と、友人である私をとおして、この事実を語ってほしいとお願いをされた。その子どもは話を聞いていくと、家族構成などから（あれ？自分の家族？ママの友だちから聞いたけど、これってうちのことやろ）と思ったようだ。それをきっかけにたくさん話ができた。学校の取組が自分のルーツを知るきっかけになった。

熊本　他人事に終わらせないためにどうするか。自分だったらどうするか。自分がこれまでいかに、差別に取り込まれていったか、見過ごしていたか、後悔の気持ち。自分自身が学生時代に友だちを傷つ

けてしまったり、立ち向かえていなかったり、心が痛む。子どもたちに向けるメッセージをまず自分に向ける。今、自分は反省している。連れ合いの祖父は、自分の住んでいる場所では反応しなかったのに、自分のルーツの場所を伝えた時に、なんで黙っていたのかと怒ったことがあった。「きみは部落出身か」と問われ、「違います」と返してしまった。いかに他人事で終わっていたのかと、今もなお後悔が続いている。経験したことを伝えていく。どこで生まれたとか、自分の責任でないことを責められるのはおかしい、と返すべきであった。自分自身が傍観者、当事者、差別者になりうると思ったうえで、子どもたちに向き合うべきだと思う。祖父については差別者と気づかせないまま、亡くなってしまったのが残念だ。

Ⅲ　総括討論

－2日目総括討論①－

京都　昨日の発言の補足をする。保育所は、就労で預ける場所だ。同和保育所では、両親とも働いている家庭が大半。一部、生活保護を支給されて、子どもを預ける必要はないけれども、保育所に子どもを預けるということがある。でも、預けることによって、親の厳しい生活から、子どもを分離させ、共同生活を受ける意義はある。30代でも働けず、生活保護を受けるという、ずっと強いられてきた差別の現実が背景にある。なぜそのような生活をさせられているのか考えてほしかったということを、言いたかった。

　私は、全て部落の子という状況で教育を受けてきた。優秀な子は、私学を受ける。受けたけど不合格だった子は、地元の中学へ行く。私学を受けたということを、差別ととらえるか、参加者に聞きたい。親の意思なのか、子どもの意思なのか。地元の中学だと教育力が落ちるから、私学を受けるのか。そのことは差別なのか。

熊本　佐賀の報告で、A さんにレポートを読んでもらったときの、A さんの反応を知りたい。

報告者（佐賀）　事実から学ぶことが大切。A さんに読んでもらったのは、私の考えを知ってもらいたかったことと、これでよいか確認したかったことという理由からだ。A さんから、「先生はこんなことを考えていたんだね。うれしくて涙がでた。」という言葉をもらった。よかったと思った。

大阪　道徳の時間で、他に扱った資料、実践はあるか。互いを尊重できる学級の雰囲気ができていったと感じるに至った、子どもの発言、行動を知りたい。

報告者（佐賀）　教材については、2年前、九同教で発表した。例えば、6年生でハンセン病の差別に立ち向かう新聞記事を取り上げたり、子どもの権利条約を使ったり、多様性については絵本を取り上げたり、沖縄戦の集団自決のシムクガマ、チビチリガマの話を取り上げたりした。社会を明るくする運動として、作文を書いたときに、ハンセン病やLGBTQなど様々なことについて、子どもたちが取り上げていた。

佐賀　4人の報告者の報告を聞いて、子どもの周りの環境をつくるという意味合いで、学ばせていただいた。道徳教育の中に、どう同和教育をねじこんでいくか。私は、佐賀大学の先生と相談しながら、「ジンちゃんケンちゃんといっしょにあそぼう」という教材を作った。セクシャルマイノリティであったり、ハンセン病であったり、題材を盛り込んだ。報告者が、道徳教員として、とりくんでいただいているのが心強い。2023年までの権利にくわしく学ぶという学習を行った。Aさんは不在だったが、多様性を前提とした学級づくりを行った。私の担当するクラスにも教室に入れない子がいる。「待つこと」が大事を踏まえれば、咀嚼できない自分にもどかしい。私の子どもは、聴覚に障害があり、私学に進学したいけれど受験できなかった。子どもを育てている中で、子どもの最善の利益を考えるなら、「あなたの存在はかけがえのないものだ」と言いたい。息子は、「ぼくは障がい者なの？」とつぶやいたことがあった。障害の有無にかかわらないということを言いたい。教育には未来がある、教育には最大の無限の可能性があるということを保障したい。差別される側、する側にもならない。大会報告・資料集の中にも障がい者への差別について記載されている。先ほど発言があった、地域の同和地区以外の進学については、差別だと私は考える。また明日からがんばろうと思う。

熊本　自分にも悩みがあって、解決につながった。2点気になることがある。勤めている学校に、パニックを起こしがちの子がいる。市内の音楽会が開かれることになり、その子を出場させないほうがいいのではないかと言われたことがあった。なぜなら、その子は、大勢の前で、「しね」と言ったり、マイクを取ったりすることがあったからだ。出場して、同じようなことがあると、保護者も周りもびっくりするのでは？という考えからだった。結局、出場せず、学校に残って自習をすることになった。他には、一人は自分で行きたくないという子がいて、それはそれでよいのだが、同じような理由で行かなかった子が計二人いた。それをおかしいと思いながら、言えなかった自分がいる。同じ学校に、10万人に1人という皮膚病の子がいた。小学校に入るときに、何かあったら、治療をするか、保護者を呼んでと保護者から言われていた。中国籍の子だった。学校では、汗をかいたときに、ちょっとのことで心配し、難病のために「なにかあったら？」と思って「(学校では)ちょっとできません」と、保護者を呼んでしまう。教員が対処すればいいのにもかかわらず。勇

気を出して同僚に言っていきたいと思う。

報告者（佐賀） 同じような子が来年度、入学してくる。医療的ケアが行われない子で、保護者が学校に説明に来た。保護者の付き添い解消が求められるが、訪問看護など、いろんな機関と連携しながら、模索しているところ。研究者から聞いた話だが、誰かが排除されることによって成立する便利を捨てたい。権力者の都合の良いように社会をつくるのではなく、子どもの最善の利益を考えて私たちはやっていきたい。

報告者（大阪） 小学校時代に住んでいた地域にも、被差別部落があった。みんなにとって当たり前のことでも、私は自分の体調の関係で、何かのたびに行くか行かないかという小学校生活を送ってきた。当時の先生が、自分も修学旅行に行けるように努力してくれた。子どもではどうしようもない中での先生の一言や先生の支えについて、子どもはわかっていないようで、わかっているものだ。この全人教の会場で参加者の皆さんが発言した時から、取組はスタートしていると思う。そのまま、取り組んでいただければと思った。先ほど出た、地元の中学に行くか、私学に行くかの話で、私の周りでも、私立に半分ぐらい行く子がいて、当時は理由がわからなかった。だが、勤め始めてからやっと、背景があるということがわかってきた。私たちの学校では、公立で、就学前から進学についてどう考えるか、保護者と話し合ってきた。進学後、子どもたちが「将来こんなふうになりたいと思うこと」を聞き取ってきた。「住んだ地域が大好きや」という子どもの気持ちを見取っていきたい。

－2日目総括討論②－

奈良 性の多様性について、LGBTQ と、性的マイノリティの人を総称してよいのか。以前、性的マイノリティの当事者の講演の中で指摘されていたので自分では気をつけている。報告を聞いて、地域や学校の取組がつながっていると感じた。奈良では、まだまだ地域差が大きい。部落がないから、取組をしないという学校もあるし、積極的な学校もある。今日参加して、力をもらった。奈良のために、全国につながるように、がんばりたい。京都の方の発言にあった、入試の区域外受験（私学受験）のことに関しては、難しいと思った。私立を受けたら差別かというとそれも違うと思う。幼保の実践を次につなげて、どこでも学べるということをしていきたい。

報告者（佐賀） 自分もいろいろ学習してきた中で、性的マイノリティという言い方にも違和感がある。SOGI が最適だと思っている。

大阪 進学のことで、隣の小学校は私立受験ゼロだったが、取組が必要だと思う。小中が連携している強みがある。「シュウイチさんが入学して来るから、トイレをウオシュレットにする」などと取り組むのが大事だ。そうならないのはおとなが悪い。人権課題の聞き取りをしていく必要がある。「分けること」、「特別支援学校があること」が差別。「迷惑かけるんじゃないか」と保護者が言うが、授業中に飛び跳ねることを許容するとか、縦割りの交流とか、取り組むべき。保護者の聞き取りで、「進路で迷っている。でも6年間、みんながおるから楽しくすごせた。特支という自分の選択があっているのか。でも最後はみんなを好きやから、みんなと一緒の学校に行きたい。」という話があった。「みんなで一緒に行ったらいいやん。それがあたりまえやん。 漢字が読めず、板書をサポートしてもらわないと読めない。サポートしてもらっているから。みんなには言われへんけど。ここやったら言える。支援学校に決めたけど、それでいいんかな、と揺れている。」と子どもからつぶやきを聞いた。分断をしない。誰一人取り残さないと意識することが大きい。当事者の子どもたちにとって、知ったことで重荷に思うかなと考えたが、そのようなことはなく、子どもたちはたくましい。なぜかといえば、「なんかあったら相談においで！」と子どもたちは言われているから、自分のことについてわかっても、別に不安はないようだ。相談できる地域があると知っていることが、命を守ることにつながっている。自分事にすることは難しい。その子たちが差別する側にまわるかもと焦る。でも　待つ。自分の選択を待って、子どもが自身の言葉で　中学校につないでいってもらいたいと思っている。

兵庫 児童館勤務で子どもが2人おり、上の子の5年生が不登校だ。自分自身が「部落の子」と中学1年のときに聞かされ、解放学級で学んだ。自分が部落出身で、そのことについて子どもたちの前でも話し、先日も水平社のツアーに連れて行ったり自然と出会えるようにしたりした。しかしある日、子どもに「母ちゃん、メンタルやばいから学校行きたくない。」と言われた。理由は、自分だけでなく、周りの子のことについても悩み、自分事としても傷ついてしまうくらい、情緒不安定かつ敏感なところがあるから。学校ってなんなんやろ、と思う。子どもには「いいよ、行かなくても」と言いながら、やっぱり心配してしまう。友だち、勉強のことが心配。先生は「とにかく来いよ」と言う。子どもは今は給食だけ行っている。「子どもにとって最善の利益」は「その日一日を幸せに過ごすこと」と考える。 学校の子どもたちは「ずるい。お前、学校行ってへんのにスケボーは行くんか」と言ってくる。私は、学校へ行く権利、行かない権利、遊ぶ権利がある、と伝えている。「中学校いかへん。」と子どもが進学について言った。でも、ある学園へ行きたいと言っている。子どもの自主性を尊重する、片道1時間半かかる学校へ行きたいと言って、何枚もの文章の願書を書きあげた。子どもが学びたい、行きたいと思ったときに、すごいパワーが出る。差別に合うかもしれ

んけど。私は精一杯愛して、自尊感情が育つようにがんばって育ててきた。でも差別がつらい。差別されるときって小さくても、100人が「大丈夫」って言っても、1人の言葉が傷つける。わたしは、先生と話がしたい、と思っている。家の様子も見てもらい、知ってほしい。子どものことを知ってほしい。ここに来て、みんなの、たくさんの先生たちの話を聞いた。もっと先生を信用して話していこう、そして、私もがんばろうと思っている。

大阪　報告の取組は、自分を表現できる場、鋭いアンテナをつくっていっている。子どもたちには持ち味を理解し合うようにさせたい。全ての良いことも悪いことも含めてわかりあうようにしたい。子どもも担任も含めて、いいことも悪いことも理解しあうことが大事。子どもの最大の利益とは、自分の思いを表現できる力をつけてあげること、だと思う。すべての先生がそれをできるとは思わない。若い人はあまりアンテナを持ち合わせていない。アプローチがたりないというのがある。そして行政のサポートも必要。大阪市教育センターには　不登校の子が、いつ行っても帰ってもよい部屋がある。今、担任に限界もある。スクールソーシャルワーカーに頼るなど、自己肯定感を高めるのに学校だけでは限界がある。

熊本　大阪の報告を聞いて、ルーツについてや差別の現実に、向かって立ち上がっていく姿に勇気をもらった。SNSは不確かな情報で選挙結果も左右される。差別に陥れる風潮もある。今の学校現場は若い先生も増えてきて厳しい状況がある。人権学習をしていく必要がある。どうやって伝えるか。私たちのサークルでは、リポートの始めには必ず、「子どもをとりまく差別の現実」を書く。次に、それについての課題を書く。差別が見えにくくなっている。具体的に差別の現実から学ぶ。子どもの前にいる私たちが何もしないことはよくない。声をあげる。声をあげても、失職することはない。だから、そういう生き方を大事にしたい。

佐賀　小中学生時代にマイナスイメージをすり込まれた、と昨日発言した。でも同時に、差別に対する怒り、反差別のことを学んだ。部落問題学習は必要。あるとき、部落差別解消推進法の講演の後、確認したことがある。法令は変わっていくけど大事なことは水平社宣言だと。学校の中で差別が起こっている。最終的には管理職に決定権があるが、熊本がすべてそうではない。

大阪　小学校2校、中学校 1 校合わせて3校の連携が大きい。小学校 6 年時に混合クラスで授業を受けるなど交流もある。報告にあった、Aさん、Bさん、Cさんの 7 人がバスケ部に所属している。2, 3年生も 7 人で＋7 人。入ってきた 1 年生はパワフルなので、がむしゃらがかっこわるいと思っていた2, 3 年生の子は、全力の1年生を見て、がんばろうと思ったそうだ。今、Aさんは朝鮮語学級に来ていない。理由は「どう思われるかわからん」とのこと。「本人に任せる」と保護者に言ってもらえている。半分の人数は「自分のなかま」なのに、A さんはなかなか言い出せない。Aさんはリーダーシップがあり、運動神経がよく、みんなから認められていても、マイナスを感じると主張できなくなる。Aさんには根っこの自分をわかってほしいと思っているけれど、本当のなかまをつくれるかだと思う。今回参加して、しっかり持ち帰る。

大阪　差別落書きが団地の壁であった。どうしていくんや、と投げかけた。6年生が怒り、「なんで？どんな思いでこんなことしたん？」と話し合った。校内の落書きを消すことにした。自分たちだけでなく5年生も誘うことにした。Aさんが「自分にメリットはないけど協力するわ」と言ったが、地域学習（青少年研修センター）で自分の中の加差別性を知ることになった。「ネットで調べてしまった」とのこと。生まれた時から差別されている、いっしょに闘ってなくしていこう、と話がまとまった。Aさんは、振り返りに「差別をなくしていく」と書いた。これから6年生にどう広めていくかを考えていく。

Ⅳ　分散会まとめ

最後に4人の報告者から一言をいただいてから、まとめに入った。

本分散会では、取組の原点について聞く質問があり、報告者や参加者の部落問題との出会いや変わりめについて語られた。討論を受けて、差別をなくすなかまを、それぞれの地で広げていくことを確認した。

討論の中で、答えや結果を早く出すのではなく、求めることを焦らすのではなく、待つこと。そして、子どもたちが、おかしさに気づくまで待つことの重要性が、確認された。一方で、学校のルールによって同じ時間で同じことをしなければいけないなど縛られた生活が存在し、そこに入れない子どもが自分を否定している現状がある。そう思わせているものはおとなの考えであるということを、私たちは常に意識していかなければならない。子どもにとっての「最善の利益」とは何かを考え、最優先に取り組む必要があることも確認された。